

## はじめに

私は「意識」という観点から文学研究を進めています。

私が「意識」の問題について真剣に考え始めたのは、本書の中でもたびたび触れているように、夏目漱石の研究に取り組んだことがきっかけでした。ただ、はるかそれ以前、まだ高校生だったころ、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』やヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ婦人』などをなんとなく読んでいたことが、そもそも始まりだったのかもしれない。

幼いころから読書好きだった私ですが、そのころから読むのはもっぱら、日本古来の昔話や物語、また翻訳された英米文学が中心で、日本文学、特に明治・大正期を中心とした近代日本文学は、教科書で出会う以外、敢えて積極的に手に取ることはありませんでした。

それが、大学の日本文学ゼミの授業で初めて夏目漱石の『坑夫』という作品に触れたとき、文字通り衝撃が走ったのを覚えています。この流れるような描写は何なのか、あの、確か、いつか読んだことがある、「意識の流れ」なのではあるまいか……と。

そこから、私の「文学」に対する取り組み方が変わりました。

ここで、まずは、私の漱石研究における一つの見方を示しておきましょう。

詳細は本論でも触れますが、ウィリアム・ジェームズを受容し、ベルグソンを読み込んだ漱石は、取りとめなく流動的な「意識の流れ」の内部には、決して明確化することなどできない、純然たる自己存在があるのではないかと、という考えに辿り着いています。そして、そうした自己存在が、他者との関り、周囲、社会、そして時代やさらに、何

かわからない自らを取り巻く運命のような流れの中で、様々に模索を重ねながら進んで行くしかない、という大きな結論に至りました。

自己と他者との間には、どんな近しい関係でも、決して踏み越えられない壁がある、その事実に対して漱石は、「作家」という立場から、より大きな視野を持つて立ち向かっていたのです。

漱石が、ジェームズの著作に影響され、その手法を自らの作品に取り入れようとしたように、私の捉え方も確実に変化していきました。

漱石文学に対する考察を、私は、改めて、現代の「文学」や芸術に対する取り組み方に当てはめて、作品に表された「意識」という観点から研究を進めるようになったのです。

ただ、私がこの研究方法で文学を読み解くようになって、それはいつも疎外された場だったようにも思います。たとえば、文学における「心理」や「意識」の研究など、所詮は創作の世界、敢えて言えばファンタジーなのだから、研究対象に値しない、「意識」は脳の反応の一部で、データや目に見える事実が第一、いくら作中の「意識」に注目してみても、それはまやかしにしか過ぎないし、単なる印象論でしかない……などと、かなり厳しい見方もされました。

もちろん、文学作品はフィクションです。虚構の世界です。

けれども、いや、だからこそ、作品が発表されたその時代における、文学や芸術表現の中に、決して誰とも同じではない、それぞれ個々なる人間の、多様な心的世界のサンプルを発見することができるのではないのでしょうか。「こころ」がどう描かれ、それが、どう読者に受け止められるのか、他者との関りの中での外側から見える「心」の世界と、内側に潜む心的世界、それらは、あえて文字として表された作品だからこそ、じっくりと、客観的に考えることができるようにも思うのです。様々に表現されている現代文化の中に、「意識」のありようを探り出すことは、外科

的手術では暴き出せない、さわめてデリケートで、あいまいなる世界へと敢えてメスを入れていくようなものなのかもしれません。

そんな文学研究の方法があってもよいのではないかと、漱石に刺激を受けた私は、文学を「意識」という観点から探求しています。

第一部 「意識」とはなにか

## 第一章 「意識」の手がかり

「意識」とは何か、それは、科学の分野ではあくまでも「脳」の一つの反応で、何らかの「物質の変化」の「結果」に過ぎないとされる見方が大勢を占めている。確かに「見えないもの」、「つかみどころのない世界」の領域は、不可解極まりないので、個々の「精神」が属する当該身体所有者自身でも、その全容を捉えることなど不可能だ。そして、その「意識」なるものの解明には、医学や科学の分野はもとより、文学という分野でも、多くの論究がなされている。そこでまず、筆者がこれまで関わった文学的研究からの示唆を提示して、心的世界・「意識」というものを解き明かす、その手掛かりとなるものを示したい。

自覚できる「意識」のその奥に、捉えきれない「無意識」層が、どれだけ果てしなく広がっているものなのか。そして、そんな領域に、時に注目され、取り上げられている、いわゆる「スピリチュアル」なるものは、どう位置付けられるのか。「精神性」「霊性」なるものへの解釈をどのように捉えてみるべきか。

現実という、確かにあるこの空間を隔てて、さらに広く存在する(かもしれない)何か「見えないもの」、そして、それに、ふとした瞬間に呼応しようとする「意識」とは果たして何なのか。

まずは、それらを考えよう。

### 一 見えない世界

大正十一(一九二二)年生まれの水木しげるは、幼いころの体験を、次のように記していた。

のんのんばあが和尚さんと話をしているあいだ、オレはもっぱら本堂にある地獄極楽<sup>(2)</sup>絵を眺めて楽しんだ。死んだらほんとうにこういうところに行くのだ、というのんのんばあ<sup>(1)</sup>の解説に迫力があつたせい、いつ行っても長時間見とれていた。(略) オレはこの絵によって、別の世界の存在というものを知った。のちに、軍隊にはいつて南方へ行ったときに、ほかの兵隊とちがつてすぐに地元<sup>(3)</sup>の生活にとけこんだのも、別の世界というものがあることを知っていたからだし、民俗学に興味を持っているんな村の生活をおもしろいとおもうようになったり、妖怪の世界を探求してみようとおもうようになったりしたのも、地獄極楽の絵から受けた衝撃によるのだらう<sup>(3)</sup>。

幼いころ傍にいた老女からいろいろな話をきくうちに、しげる少年は、「だれもないのに、なにかいる気配が感じられる」／＼目に見えない世界があるような気がしてきた。そこには、のんのんばあ<sup>(1)</sup>のいうさまざまなのがいろいろある」という感覚は、異空間なるもの、「意識」が沈み込む先をさらに深く究明することの大きな手がかりとなる。昨今、「スピリチュアル」という言葉が頻繁に使われるようになり、「臨死体験」「心霊スポット」なるものがメディアの中でも多々取り上げられるようになっていく。日本では、古来、こうした霊的存在についての認識は、古事記・日本書紀の中にも、又、民話や言い伝えの中にも数多く示されてきた。

近代以降の例を見れば、明治二十(一八八七)年前後には、日本において、「こっくりさん」が大流行を巻き起こしていたという事実もある。それは、「此の頃同地にては彼狐狗狸が大流行にて新京極辺には狐狗狸伝授所<sup>(4)</sup>という看板を掲げたる方も出来……」と新聞にも掲載されるほどだった。このことについては、一柳博孝の研究によると、「こっくりさん」について、「手軽に装置を創りあげ、簡単に、縁もゆかりもない自然霊を呼び寄せて質問する形式」の、現代においてもなお続いている「コワいもの見たさ」からの行為であり、「大人から子供まで、誰でも簡単に参加できる託宣システム」・「もつともトレンディな遊び」であったと紹介されている。

ただ一方においては、これらはかなりの「謎」に満ちた、「うさん臭いもの」としても見られていたらしい。当時言われていたいくつかの代表的な見解には、「人間以外の超自然的存在(いわゆる鬼神の類か)だとするもの、「人間を化かすといわれていた動物の仕業」だという説、「電気的作用」なのではないか、というもの、そして、「参加者の誰かが故意に動かしているに過ぎない」、などがあつた。

たとえば、怪談「牡丹燈籠」などの作者としても知られる三遊亭圓朝が、明治二十一(一八八八)年に次のように語っていたことは興味深い。

今日より怪談のお話を申し上げますが、怪談ばなしと申すは近來大きに廃りまして、あまり寄席で致す者もございません。と申すものは、幽霊というものはない、全く神経病だということになりましたから、怪談は開化<sup>(5)</sup> 先生方は嫌いなざる事でございます。<sup>(6)</sup>

当時からすでに、「摩訶不思議なできごと」はあえて、「娯楽性」の中に封じ込め、真つ向からは触れない領域へと押し去られ無視されていたのだろう。それ以後、現在に至るまで、そのような見えない領域、ひいては、幽霊、お化け、超心理学的な分野への興味・関心は、決して尽きることはない反面、それらは、あくまでもエンターテイメントの領域となっていて、真面目に考えられることはしなかった。

確かに、筆者自身、意識の研究を進める上で、どうしても突き当たってしまうこうした問題については、特に科学や医学を専攻する研究者諸氏との会話の中でもよく聞かされていたことだった。「意識」とはあくまでも「脳」の反応なのであり、「物質の変化」の「結果」に過ぎない。それを、「流れ」などという、掴みどころのない曖昧なるものを研究対象とすることそれ自体に、多くの科学者は、首をかしげるばかりであった。科学的立場から見れば、「見え